

「オネエ所長の調査ファイル」 # 1

山崎浩治

1

「息子夫婦が離婚危機。和解させられないか」

初老夫婦から調査会社「金沢プライベート・リサーチ」にそんな依頼が舞い込んだ。ここは弁護士や警察に相談するほどではないが、当事者間では解決が難しい離婚や不倫、DV、借金問題など、ありとあらゆるトラブルが持ち込まれる通称「金沢駆け込み相談所」である。所長の市山は小説に登場する名探偵フィリップ・マーロウを敬愛する中年男。襟を立てたトレンチコートにソフト帽がお気に入りファッションの市山が新人スタッフの透に調査を命じた。

地元企業に勤める会社員・聡(36歳)の妻・美晴(34歳)が2人の子どもを連れて実家に帰ったのが1カ月前。離婚と養育費を求める調停を申し立てたのはその直後である。夫婦は職場の元同僚で、1年ほどの交際を経て、8年前に結婚。美晴は結婚と同時に退職し、いまはパートで働いている。金沢市郊外に家を建てたのは今年7歳になる長女が誕生した年のことだった。依頼人によると、聡は「平日、子どもの顔を見るのは寝顔だけ」という会社人間で、離婚を求められる理由が皆目分からないという。市山は当初、美晴の男性関係を疑ったが、周辺から男の影は浮かび上がらなかった。

透の報告によれば、美晴の日常は小型外車に乗ってパート先のスーパーマーケットと5歳の息子が通う保育園、実家を往復。週に何度か、2人の子どものスイミングスクールや英会話教室への送迎が加わった。透が自らの見立てを述べた。

「女性は浮気する時、オシャレするものですよ。でも、この奥さんが着ているのは時代遅れの洋服ばかり。彼女に男がいるとは思えません。離婚を求めた理由は夫にあるんじゃないでしょうか。たとえばDV。外見は温和でも、家ではちょっとしたことですぐ怒り、暴力を振るう男は珍しくないでしょう」

ほおづえをつきながら聞いていた市山が口を開いた。

「新人のくせに鋭いこと言うじゃない、トオルちゃん。さすが、あたしが見込んで採用したイケメン君だけのことはあるわ」

ダンディなスーツ姿に不似合いな女口調である。しぐさもどこか女性的だ。市山はフィリップ・マーロウに恋する「オネエ所長、なのだった。

2

「けどね、ダンナに暴力や不貞などの落ち度があるなら、どうしてそれを主張してこないの？ 妻が離婚理由として調停に申し立てたのは性格の不一致だけよ」

市山は警察退職後、オネエであることをカミングアウト、男女の気持ちに精通するトラブル解決人として事務所を開設した変わり種だった。

「とはいえ、トラブルの原因は夫にあるかもね。トオルちゃん、ダンナも調べてみて」

夫婦の住まいは金沢市郊外にある新興住宅地の一画にあった。モダンな外壁の洋風住宅で、築7年ながら、まだ真新しい。しかしウッドデッキを備えた庭はほとんど手入れをしていないらしく、雑草が生い茂っていた。玄関先の駐車スペースには夫婦用のほか、両親や友人を招くためか、4台分ほど確保してある。最近、停まっているのは夫が使うSUV車だけだった。

「瀟洒なマイホームに、夫婦そろって高級車。うらやましい限りですよ」

透はそう報告したが、調査が進むにつれ、厳しい経済状況が次第に明らかになっていく。夫が昼に足繁く通うのは会社近くの牛丼屋。コンビニのおにぎりが1個という日もあった。夜はスーパーで買いだめした特売品のカップめんを食べているようだ。小首を傾げて思案する市山がつぶやいた。

「別居中の妻子に生活費を送っているにしても、つつましい生活ねえ。何かで読んだ現代ことわざを思い出したわ……住宅ローンで家を建てると、ドアを開けて貧しさが入ってくる。そして愛が窓から逃げていく」

3

念願だったマイホームは長女が生まれるのを機に手に入れた。価格は3000万円で、35年の住宅ローンを組んだ。月々の返済額は10万円を超えたものの、夫婦の収入は手取りで35万円あり、返済は十分に可能と思えた。

しかし、入居ほどなくリーマン・ショックによって状況が一変する。聡の会社は残業手当、ボーナスどころか、基本給までカット。月々の収入は5万円以上減った。さらに悪いことに新居の近隣に高級車が並んでいたため、負けじと夫婦そろって高級車を購入しており、そのせいで住宅ローンにマイカーローン、やがて子どものお稽古ごとの月謝も加わって、毎月の生活費は30万円を超え、家計は逼迫した。

聡が晩酌で飲むビールを徳用焼酎に変えてもらった。湯船のお湯で体と髪を洗い、残り湯を洗濯に使った。家族で最後に外食したのは下の息子の去年の誕生日。息子は「ファミレスのデザートが食べたい」とぐずったが、なだめすかしてどうにか我慢させた。それでも焼け石に水だった。いまでは自分はおろか、子どもたちにさえ新しい服を買ってやれない。自分の給料はファッションや飲食費、旅行に使っていた独身時代が前世の記憶のように思える。

住宅ローンを完済するのは聡が64歳の時。退職金で全額返済するプランだったが、定年まで勤められる保証はどこにもない。子どもの教育費は成長するにつれて増えていくだろう。こんな儉約生活があと何十年も続くのかと思うと、心底うんざりした。このままでは消費者金融に手を出すのも時間の問題だった。子どもの成長を楽しみにこつこつ働くタイプの聡に不満はなかったが

、いずれ家族共倒れになる。美晴はそう考え、離婚を決断したのだった。

4

「近所のお節介なおばさん、ううん、おじさんのアドバイスとでも思って聞いてね」

数日後、市山は依頼人を介して「プライベート・リサーチ」のオフィスに美晴を招いた。

「あなたは離婚すれば新しい人生が開ける、と楽観的に考えているのかもしれない。けど、子ども2人を抱えた離婚は相当厳しいわ。あなたの収入は月10万円。ご両親は年金暮らしで、あなたたち親子を援助するゆとりはないはずよ」

市山のオネエ言葉が話す内容の厳しさを和らげる緩衝材の役割を果たしている。美晴はこの人なら、何でも率直に言える気がした。

「ですから、夫から養育費をもらいます。その権利が私と子どもたちにはあります」

「あなたね、養育費をもらえる人は幸運なのよ。別れたダンナが再婚したり、恋人ができたりして、知らんぷりされる例はごまんがあるんだから。そもそも、あなたたちが組んだ住宅ローンは夫婦共働きが前提でしょう？ 離婚すればご主人は支払い不能になるわ。そうなれば養育費どころの話じゃない」

「そしたら家売ればいいじゃありませんか」

「売却してもローンが残ることは覚悟した方がいい。下手をすれば、大きな借金が残って、ご主人は自己破産。請求は連帯債務者のあなたに行くのよ。あなたも自己破産かしら」

「私にどうしろ、と言うんです？」

「危機に瀕した夫婦が進む道は3つあるわ……離婚する。我慢する。現状を改善する」

「いまさら現状を改善する方法なんてあるんですか」

「簡単よ。家を処分し、借金が残ったら、夫婦が身の丈に合った生活をして地道に返していけばいいの」

美晴の曇った表情に光が差したのを、市山は見逃さなかった。

5

夫婦はその後、よりを戻してマイホームを売却、夫の実家近くの集合住宅に転居した。依頼人によれば、家を処分して400万円ほどローンが残ったが、双方の実家が200万円ずつ負担して帳消しにしたらしい。夫は中古の大衆車に乗り換え、妻は自転車の荷台に息子を乗せて保育園に送迎し、パート通いを続けている。

とある日曜、市山と透が夫婦の様子を見に行くと、4人家族はファミレスでランチを食べていた。ウェーブのかかった長髪カツラをつけた市山はフリルのついたワンピースを着こなしで、女に変身している。まつげをカールさせ、パッチリした目元がおぞましい。そう思いなが

ら透が声をひそめて懇願した。

「所長、女装はやめて下さい！」

「尾行や張り込みする時、趣味と実益を兼ねて変装するのがあたしの流儀なのよ」

「何が変装ですか。かえって目立ってるでしょうが！」

周囲の客たちは市山を窺いながらヒソヒソ話を始めていた。

「でも彼女にバレてないからいいじゃない。どうかオカマいなく」

好奇の視線に、どこ吹く風の市山がダジャレで答える。実際、美晴は隣席にいる市山に気付いていなかった。

「ダンナは牛丼からハンバーグに生活水準が上がったみたいですね」

透が横目で家族のテーブルを確認すると、市山が満足そうにうなずいた。

「住宅ローンが完済するまで、マイホームは金融機関のもの。他人の資産のために、離婚することなんかなかったのよ」

「けど奥さんは一度、離婚を決意したわけでしょう。ひびが入った夫婦の絆をむりやり結びつけても、うまくいくものなんですかね。壊れたものなら、きちんとケジメをつけて再出発した方が幸せになれる気がします」

「トオルちゃんはまだ青いわねえ。ま、そこが魅力でもあるんだけど。今度、プライベートであたしとデートしない？」

「キッパリお断りします」

そんなやりとりをする市山と透の傍らで、目を細めた夫婦がうれしそうにデザートをほお張る子どもたちを眺めていた。その穏やかな横顔は最近、離婚危機のあった男女のものとは思えない。市山が続けた。

「煮物は冷めた時に味が染み込むというでしょう。夫婦だって同じよ。逆境を迎えてこそ、味が出てくるものなんだから」

「そういうものですか」

「口げんかした5分後に、別の話題で笑い合えるのが夫婦なの。もっともあたしはカミングアウトして、奥さんに逃げられちゃったけどね。あ～あ、マーロウみたいなイイ男はいないかしら」

今回の一件で、夫婦は家を失った代わりに大切なものを見つけたわ。市山は心のなかでつぶやきながら、小指を立てて紅茶を飲み干した。